

下浦の開港史(上)

――主として中世の展望――

東京都板橋在住(米水津村竹野浦出身)
 会員 御手洗 一 而

(1) 下浦について

下浦の開港を考ふる順序として、まず下浦の説明が必要である。

下浦とは、現在の米水津村・蒲江所を総称する中世からの呼称である。旧藩時代では、城下町の町に対する在・浦であり、郡部を在方、海岸部を浦方とか浦部とか呼び、浦方は年代別には至代別には必ずしも明確でないが、北は津久見浦から、南は日向國境斗井崎まで及んでいた。その浦方の北十九浦を、上浦・中浦・下浦と行政区分して三つに分け、下浦とは、鶴見崎以南斗井崎まで(後に名護屋浦南端の宇戸崎までとなる)の海岸部をいい、ここで各浦名の詳細は省きたい。

下浦を中世からの呼称として認めたいのは、近世になって、旧藩領毛利高政が入部したさい、御手洗玄蕃が慶長六年に提出した高帳に、中浦の文字や各浦の明記があるから、佐伯氏時代の末期には、各浦の行政は、佐伯氏によって明確に掌握されていると思われる。しかも、佐伯氏が佐伯藩を支配した時に、下浦名を考えずに、上浦・中浦と呼ぶのも妙に思えるから、この下浦の呼称も、やはり、佐伯氏による佐伯藩の荘化とともに生じた呼称と

するものが妥当だと思っている。

これに關連して一つ注目したいのは、中世から三區画された上・中・下各浦について、大ざっぱには佐伯藩を南北に分り、北部を上浦、南部を中浦とすると、下浦は実に広範囲にわたっていることである。

これは、石高や集落による人口等が割りふりに關係する。米水津湾・入津湾・蒲江湾・名護屋湾を集合して、上浦や中浦に相当することば、歴史的にはその後進性を意味する。

地質学的見地は別として、地理的位置については、先に「古代故郷へのいざない」に書いた通り、南進北進の両海人族の緩衝地帯となる特殊性があるが、その代わり有史以来、合戦はおろか、城や砦の一つも必要でなかった、平和地帯として誇れるものであり、後進性の地理的条件をも文証するものであろう。

(2) 伝承から学ぶもの

下浦には、考古学的にみるべきものがないから、古代を類推することは困難である。しかし、神武東征や景行紀の神話説話は、受けとり方によっては貴重な資料になる。つまり、これらの伝

佐伯藩領域とその海域



承は、当時三世紀頃、これらの出来事を伝えた原始海人族の存在を意味する。このことは、原始海人族の集落の存在が別にしても、各湾に海人族が住んでいた文証にはなる。

そして、一番古い説話に残る畑野浦の伊勢本神社の伝承や、宮野浦の説話にしても、その真疑はともあれ、その地点が海人族の定住を教えてくれる。

また地名も参考になる

例えば、米水津湾に「色利浦」がある。いりりについて、古代食物の中に、煎汁を「イロリ」と読ませている。煎汁は甘味料として、もともと古い大豆の煎汁と魚類からとる煎汁がある。著名な鯉の煮汁もそうである。してみると、米のない昔、原始海人族が火を使って「イロリ」を作っていた現象が、そのまま地名に残されたのかも知れない。このことは、米水津湾では、色利浦がかなり古代から海人族の住んでいたことを連想させてくれる。

こうして、伝承や地名からは、原始海人族の存在から各湾の拓ける順序を示してくれる。つまり、原始海人族の住みやすい条件である水や平地、気象条件の可否を自然に教えてくれる。そしてその地点が、その湾における位置において、開港順序を暗示し、微妙な示唆をよせている。

このこと及、中世にかけて、のちに考察する落人・落武者の流着地と重要な関連をもつことになる。そして、下浦の位置を考える特異性は、地理的位置と歴史的位置の二重性を常に考慮しなければならぬこと、これが伝承から受ける教訓である。

(3) 歴史的事実―落人の記録

ここで、伝承も参照しながら、歴史的事実と年代順に確認してゆきたい。

① 藤原時代

紀南熊野の住人が蒲江に入ったのが、天長二年（八二五）とあるから一番古い。

王子神社御由緒によれば、

天長ニ己淳和天皇御宇、紀南熊野ノ人米蒲シ、紀州熊野三社タル、伊弉册命並ニ御子那智山ニ坐マヌ事解男命、同御子新宮ニ在マス速玉命三社ノ御分靈ヲ御勧請セリ。之レ始メテ祭ル氏神ニシテ、当時セ戸ノ祭神ナリ。

とある。

私は当地で、熊野七軒とか地下の七軒とかいわれて、現在まで継がれていることを知った。天長二年とこの熊野一統について、単なる海上遭難者か、開拓者の地理によるものか確証はないが、下浦に外来者の第一号である。なお、同時代に、藤原純友・依伯是本の天慶の乱があるが、下浦に伝承の一つも残らないのは不思議である。

② 源平時代

平家の滅亡以来、米水津湾・入津湾に平家落人の伝説を聞くが、伝説の域を出ない。かりにあったとすれば、先住民との同化に失敗したとみななければいけない。

むしろ、頼朝に追われた義経の援軍が、入津湾に入っている。「依伯更談九十九号」に紹介された「竹野浦河内物語」であるが、この物語りは、残された遺跡や伝承を参照しても、かなりの信憑性がある。

③ 南北朝時代

米水津湾の小浦にある粟島神社が、懷良親王の避難地として、正平十三年に神社の由緒とすることは著名である。

畑野浦の西河内には、菊池氏の残党が落ちのびた伝承が残るが、これも南北朝時代のことである。

⑤ 足利時代

応永年間になると、御手洗一族が瀬戸内の御手洗島から、米水津湾の竹野浦に流着し、三兄弟が、蒲江と日州細島に分散する。

⑥ 元龜・天正の戦国時代

畑野浦の清水庵にみる如く、長曾我部遺臣が土佐から入津湾に落ちてくる。

また、天正年間、米水津湾浦代浦に、伊予の法華津の一族であった成松氏が、落武者として逃れてゐる。入津・蒲江に河野一族の諺もある。

以上、私の知り得る歴史事実を、伝承を交じえて列記した。名護屋湾については、五輪墓の一基が山腹にあることを聞いたが、それ以上は聞き得なかった。

落武者・落人の個々の考察については、その都度解明するとして、これら外来者の流転記録から下浦の歴史ははじまる。よって、海人族の中に入り組んだ、よそもの文化保有者の同化の歴史を眺めてみたい。

(4) 落人の流着地の選定

まず、落人が無断侵入する流着地の意味するものを考えてみたい。

さきに、下浦の位置について、地理的位置と歴史的位置の二重性を書いた。

地理的位置とは、海人族の南方系と北方系の緩衝する中間地点で、平地のないリヤス式海岸で住み難く、一口

に後進地といっても、中央はおろか地方豪族においても問題外の土地だったのである。同じ配流地にしても、日向国などは、平安時代から藤原氏の決めた、中央から選定の配流地である。ここに、歴史的、あるいは政治的位置づけの意義がある。つまり、同じ遠隔地にしても、軍略的に政治的に全く認められない。無価値な土地であったといえる。

その結果、下浦の特色は、敗北者が身を隠すのに良い場所、ひっそく地に最適の条件を備えていたことになり、支配者の権力の及ばないところ、もぐりこむ形となっている。これは、佐伯氏の支配が遅かったこと、佐伯氏の政略に關係するが、ここではしばらくおくとして、落人の流着地を眺めることにしたい。

各湾に一帯に言えることは、湾の北側にその流着地が集まっていることである。

米水津湾では、竹野浦の御手洗一族、浦代の成松氏であり、入津湾では畑野浦の菊池氏や長曾我部遺臣、蒲江湾では、熊野一党、河野・御手洗一族である。

ということ、原住民が住んでいた南側を避けて、北側に集まっている。ここで、米水津湾に例をとってみたい。

先に書いた「いろり」の地名が古代を連想させ、宮野浦の宮は、三世紀頃の出来事であろう。この南側の二浦は、古代海人族の定着を示し、次に粟島神社の小浦、御手洗一族の流着した竹野浦、最後に成松氏が入った浦代浦となり、このことは、湾内の各浦の開墾順序を例証することになる。面白い現象である。

もちろんで、人が住むには、地形や気象その他いろいろの条件に左右されることはいまでもないが、落人が先住民のいない場所を選定することと考えると、やはり、

南側の方がその条件に適して、先に振っていたのである。

このことは、古老のいう、溝口から風や潮の直接吹きつける北側は、住み難いという現在にも符合している。

いずれにしても、こうして流着した各落人部族は、独自の生活圏を形成してゆくことになるが、無断侵入者と佐伯氏との關係は、どうなっていたかであるうか。

(5) 御手洗一族と姫藏の合戦

下浦と佐伯氏の關係を考察する場合、畑野浦の菊池成党は身をひそめ、蒲江の熊野一党の記録もないから、文献に現われる御手洗一族と姫藏の合戦から、佐伯氏と落人氏族との關連を求めてみたい。

(御手洗姓が、浦田衆として活躍するのが、中世下浦の最古の資料である。)

姫藏の合戦とは、永享七年(一四二五)に大内義弘の次子持世が太友持直と攻め、持直が姫藏に籠城した戦である。しかし、持直は三年前に家督を親綱にゆずり、幕府は豊後守護職を安堵し、中國・四國の援軍を送り、姫藏の攻撃を命じている。

佐伯氏は元代惟世の時代で、佐伯氏系図では、惟世の妹が持直に嫁ぎ、持直と惟世は義兄弟の關係にある。つまり、惟世は義兄弟の持直を援助することによって、幕府及び正統の豊後守護職太友親綱に引きよせられることになり、その立場は微妙であったに違いない。

こんな状況下で浦田衆が活躍し、御手洗の名がその一員として、太友文書・田北文書に残っている。

御手洗一族とつて、流着後わずか十五年後のこの合戦は、たいした戦力もなく、まして太友持直に主家としての義理も考えられない。ではなぜ、勤めたか。その理由こそ佐伯氏との關係が生じたと思われる。

つまり、苦境に立たされた佐伯惟世の立場を察して、上手に立ち廻りたかつた保身術である。惟世の苦境を救うことによって、落ちのびた一族の身の安全を保証してもらったのである。これが第一の理由である。

第二は、一族と佐伯氏の因縁であるが、少し余談を許されたい。

南北朝時代、官方を支援した伊予の河野通直は、佐伯に一年近く滞留している。この道直は、細川氏に敗れて九州の大宰府に向かう途中、瀬戸内の御手洗島で一族に助けられている。その後河野中護職は、子の通義と通之に分かれ争うが、御手洗一族の主家通之は、通義の子通久によって敗れ、御手洗一族は小早川氏の瀬戸内南進もあって、御手洗島を追われる。しかし、竹野浦流着後、姫藏の合戦に通久は大内氏に援軍として従軍し、浦田衆の活躍もあって戦死する。御手洗一族にとって、姫藏の合戦で伊予の仇討ちを果たすことになる。こんな因縁がある。

以上のような理由で、姫藏に身を寄せた一族は、その結果、日陰者から陽の当たる場所への地位を認められることになる。すなわち、正式に竹野浦を安堵され、一族は表立って竹野浦の開發に乗り出し、他の落人にも反映し、大内勢の佐伯満成から、落人の地位の好転が考えられる。そして伊予衆三島水軍の出である一族のやり方と、佐伯氏の下浦政策のかかわりあい、これからの下浦開發に重大な意義をもつことになる。(一六)